伊地知文庫
文庫20
128
2

連哥新式抄下

可隔三句物

一月日星　如此光物　　一雨露霜

いなつま　気と八非疑

霰と云それハ雨也雪霙志ぐれさ

ふきなすと雨ふる事ふくこさに合せ

一霄霰　如此浮物　　一霞霧雲煙　如此聳物　　一本

又志ぐれさま　両又風二句

麻なと苔なと皆如此

に草虫子鳥子歟

あしの物哉虫なも

三句也けさ物と云て八生類に二句更も生類よ以れ哉も三句

有虫うろくつと云八けさ物と云を同事ニて生類よ二句

一名所与名所　三句　　一七夕子月日

依為星名也

伊地知氏書册

文庫20 128 2

三百地天川年代[illegible]
[illegible]

丁 漢文白物

一同字 日出 日風 白風 [illegible]

一雲と雲 煙と烟 [illegible]

一野と野 野山と山 [illegible]

一浦と浦 [illegible]

一波と波 [illegible]

一道と道 [illegible]

一末と末 [illegible]

一草

一[illegible]と[illegible]

一出と出

一[illegible]と[illegible]

一[illegible]と[illegible]

一[illegible]と[illegible]

一[illegible]と[illegible]

一[illegible]と[illegible]

一述懷と述懷

[illegible]

俗名述懷なり　ゆへ〳〵公卿あり　ゆへ〳〵白髮なり
ひしき形述懷なり　古歌なり　ゆへ〳〵山伯等の唐衆
の戸なり　ゆへ〳〵述懷の詞なり　ゆへ〳〵ハ不埒也又述懷し何
ゆへ〳〵も意なれハ述懷にかもて不埒也猿の意ハ猿意
とてあり　ゆへ〳〵ハあとたのこ須猿なりとも猿と意なり
埒也佛弟子ハ尺伽の弟子なれ　ゆへ〳〵ハのれいろなるの也
なりあとなりさ人　ゆへ〳〵ハ意むまろ
なと衰傷も述懷也内也又白也

一神祇と祇　衰當皆又白也　**一衰當衰**

尺數白尺數神と神

と衰當衰山と山の名不　山の名不山ゆへなり

一浦与浦乃名不　海の名不名白也　**原**　松原さ原おそ物ハ

里て丁　雲原と篠原なと原也但付にゆへ〳〵也新〳〵
陽又白　ゆへ〳〵とゆへ〳〵とゆへ〳〵ハ原也〳〵ゆへ〳〵原と

〳〵とゆへ〳〵ハ形也
ゆへ〳〵ハ形也　**一朔月日夕月日**　月日に名
乃日夕乃日ゆへ〳〵月日ゆへ〳〵ひしき器なと形乃
もとゆへ〳〵　朔月日ゆへ〳〵ひしき器なと形乃
ゆへ〳〵　朔附白也　ゆへ〳〵
ゆへ〳〵なりて二色に月也松一なり
その関山形也只ハ朔日夕月詳也

可陽七白物

一同季　四季ゆへ〳〵月季ハ七白也　**一月と月**　七白但年月月日星月新年と形通

一雲与松　七白雲むすひ形ハ八白也　**一竹と竹**
也心の雲ひ形ハ七白也
絵行なり　七白なり

一田与田　田の字ハ二白耕字通の字すると二白乃り　**一衰と**

衰義と義洞与洞　**一舟と舟字**　天盤　水天

川ハ水不可満七白不可為水色
ハ墨山ハ水山ハ水字に又白の墨
ハ白なる色しゝ也ひるのこれこと
とよりそれを入くなるゝ
たゝきまりて清く黒也西乃
すゝ〳〵及といるゝし也天照
の御子也天照大神をうこと
ゝひもゝ〳〵及をなゝ清也天盤
衣ハ可満七白仙不可為衣
川衣手杜衣字に又白可墨
新よ二白を可墨さ不能
のゝ衣新よ以上又墨
樹和に墨〳〵杜よ
又白杜浦も又白
ハ已上淮ハ墨衣川ハ
ゝ例て墨又白なり

天盤ハ母の母ゝひすゝ
及ハ三墨まて
一面字 生田田上 又白 浮田杜ハ 也
一竹字 竹田 竹川
一紅代うつ杜也芦の

一衣字 袈裟衣 織女
袈裟衣ハ新に二白袈裟
者新乃袖なゝ衣

一雲字 杜浦杜浦 杜浦ハ
山ハ月前 色山彩

種綿 焙紙 注

可分別抱

一花乃波 抱ハ抱也波の花ハ離也波乃
花に花樹に不墨面也似抱也云云
一花の滝 抱ハ山ゝ抱ハ
花の波月前
一杜風の面 ハ面滝和
よあゝて
一花の雲 月前ゝゝ
きたあゝて
一杜葉雨 ハ面滝
抱よあゝて
一川霧ハ面 ハ面滝抱
よあゝて
一月ハ雲 夜の河へて
ハ不可為滝
抱 杜の河入ても抱ハ
也 ゝゝ八夜杜の河へてゝ
兵月と者と
ゝゝ也
一月の雲 日
新
ゝゝ多也滝抱也

一様戸

様和よ又白長不よ白まを地様のあるあるを
此戸地和の戸をこに八ゝりあり和の戸八和
戸地居計地を家の戸戸同前良ますてをろ
戸をゝ様戸様の本ゝてをろもをを

一本の薬衣

めに新を方
よ一の様ゝ
伏儀神農ゝ時分八衣をと
あよ本の薬をあゝて衣よをゝる地
丁様ゝ海物
ふ可様ゝ

みを地に本の薬をゝ
うゝ物地衣の彩地衣よ七白
一むの雷 ゝ物
海物に不可様ゝ
自然去よをる
をゝ地

一波の雷

ゝ白よ可様ゝ
ゝ物よ不の様ゝ
人よを白時ふ
ゝ

一波の雷

みを地あを様ゝ似物乃様
物陸地一説当時不見地
波の雷を地海物地を白地波
のゝゝ雷のゝりゝ白をゝ地

あ方よ可混合ゝ物八様ゝ
不可混合ゝ八不様ゝを

一神の雷

お一白ゝ海ゝゝ白者不
可為ゝ説をゝ云云
是の地よをれ八海ゝ地をゝゝ
れ打ゝをゝよ八あゝゝ地
三白地秋地雷海をゝ地
雷海よをゝ海の雷ゝゝ
雷乃あり物打ゝゝ様ゝ
をの時白をゝて八丁様ゝ
よ海の時白あゝ八をの時白
八ふゝ物ゝゝゝわを時白八時ふのあゝ海物よ二白地

一海乃雷

雷ゝよてもふ
乃地秋地
ゝり物よ
様ゝ

一海の時雨

雨ゝ乃を
一白をの
をゝの時白時白一のゝゝ地
をゝ八秋よあゝ物の白
をゝの雨八ゝゝの雨八ゝゝ雨

水色弁用ゝ事

一俗今波ゝて浦と付ゝ又ゝ温な
ゝ八すゝゝす苦ゝゝ白ゝ捨をゝて

主人為名所物の名地

やうの歌ハ皆祈也なを波なをの歌ハなをふともなる物也芦ハ名所なをハ祈あれとも又なをふともあつかはるゝにより祈用の如也祈ゝ用ゝ用祈用祈如ハ三句ハ名を也もゝる也居の祈用も同ゝ也用祈用祈と八せあ也祈用の如也三句もてゝ

一浦戸湾名　了為水色上野

祈用八三句すへゝを

器物名色

八地名山歌ゝ

名名ゝ名ゝ名ゝ名也山歌の

一難波志賀　地名色他准ゝ

名名ゝ八地名名色ゝ名也

郡の名也なをも見ゝと

一杜若あやめ芦

しても地名色ゝ名也

蓮蓴爾伽結　只義也

無種　水用也名也

洗濯　已上名色

名也

ゆらしてもゝ名色也芦ゝ

なをのゝゝ也ハ杜也

一郡名　日葉

名也名色也郡也云字ゝ形也

一蓮座　長ゝ名ゝ又白ゝとまゝ二句也ゝふくハ二句也

あこれやうなると云心也

以物也ゝ名ゝ云心也

一小田返　美也田をすくも美也作ゝ田ハ地美ゝ也

ゝゝ字ゝ二句小田也ありて

と山田あゝとや養説

為名所也

一布曝　碗水洞川

可強名色也

一独り名　洞の手也洞ゝ二句

きやゝなゝ

ゝ名也

一月乃氷　名ひ形ゝたま

ゝ名也

ゝ二句

ゝ名也

一水名ゝ　美也地名名ゝ也源物

ゝ二句也

一苗代　美也地名名ゝ

一早苗　已上地名色

反地樓地
ヨリ又白也

一山ヨリ左開ハ山ヨリ煙ヲ　白川の世
ミ表ヨリ
すまの
開浦ヲ

開の形也
山形也

一浦に左開ハ海ヨリ煙ヲ

開の形也
ヌ色也

一窟橋　くめれ窟ヲ
ハ姫ヲ色ヲ
ヒ兵ヲ橋れ一の国ヲリ

一薪

似木　本ヨリ白玉焼ハ形ヲ
しこみ二白ヲ木に又白
ヲ人

一猿澤清淵

姫山形九州ヨリ左
澤ハ姫山形

ハ左姫
山形

澤川も
ヒヲ

一宇治川澤

准山ヨリ左開ヨリ
山形奈准ヲ

二澤に
ヲ人の形

一泊瀬寺

ヲ人ハ
山形也

一清見寺

准左浦ヲ
開ヲ色

太子遠
ミミ不

一雜波寺　非
ヌ色

一木曽路玲瓏澤

准小野ヲ形
奥ヲ道山頭

此二ハあまり大きなる不ヲる乃里も野もあれハ姫山形
道ヨリ又白玲瓏ヨリ九字西ヲ形ヲ下姫西ヲ郡の名也

一霧林　可為
樓物

一鶯嶺　可為山形并出鶯
霧林ハ山頭穂物ヨリ

八不姫ヲ男
山茂ヲ絵ヲ云

一仙人　人偏也松木伐者れ
ヲ松木ヲ山形也

仙ヲ肖今ヲ尺ヲ物なヲ何ヲもなき
ヲ男霧林ハ尺伽涅槃ヲ如也鶯尺ヲ澤ヲ左ヲ

きハすこやさ也ヲまヨリハ
山ヲヲてハヲすさ少ヘヲり

一炭燒　人偏也冬ヲ里ヨ
ヲ色ヲも炭や

一富山　不可為
山形

海物
ヒ冬ヲ

ヲり源氏ヲすこヲもおまへの富山ヲ
やうヲもヲヲ也庭の山つさ山ヲ

一宮八澤

山形ヲ色に
不可姫ヲ
ヲヲ中ハ山形
并用ヲ九ヲ

開系也名ヲ
く澤也

一冨士澤
是ハ三ヲあまり大山ヲヲ乃
ヲ也冨士の山ヲハ不死山ヲ

名葛城

出さるゝ也天智天皇の御とく也姫か天へのぼるとてみかとへ文を
ひめさんと萬中あかり名跡に不死の薬を添へて奉る
らせられしをあひ見給ハ不死の薬もなにゝせんとて天にちかき
山を為て焼とたまひしよりそれより不死山と云と也然る
のくや姫いまだとてあまの羽衣を脱て君をあはれと思
めし出云なり郡の名も皆富士とかけり帝あふ事の
涙にうかぶ我身には志なぬ薬も何かくせん或説云此山
ハ蓬莱也昔漢朔の富士此山に来て不死の薬をもとむ

一 雲雀 山彩に不用来て也然るを雉郡上に有 可為山彩の名也近年在定云 伝ふ所今 也山の名也

一 田雲雀 雉山 名也

山 依句不可 内名不云之

一 三鳥 本ハ杜羽也燕の山とハくし此たうまさ原 氏にあるも燕のる也燕の山れやうなると云也 摂州 豆州ホ 不可山彩 名也 許也

一 燕

一 遅桜 菫 花 雉正 花

一 荻焼原 鳥巣

春也名鳥の巣ハ夜也
はる乃とハ雉なる也
也然のつまと此
さし一のみ名を也

一 雉子 きじのほとも 春なる里 きじと云 ても雉春
この里をみきてすハ春也この里をみきても
春鳴道をあれハ春ありおいとりの春也

一 氷の隣 なかるゝるとしても春也

一 あら玉の年 春

日祭 春日の祭ハ 北祢為正
二月上申日是も二月十一日よ
行ける先未の日使立近衆中
おなじくむ万葉藤祭に同府の官人まうける海きさく舞人
作とも世々名人の上へよ来て事をとかを舞を舞人も人夫出
を舞人出て洛へみらちき一くあり役當日の暁内侍むかふ
舞人参車牛御上卿年も同むかふ清和天皇貞観之十
二月九日此祭始御春日四所大明神と申す第一ハ治殿を
我いふちみ是と申す第二ハ治殿をいへなぬ志の命と申す第三ハ治
殿ハあまつこや祢の命申す第四乃治殿ハ姫治神是也神護
景雲元年六月廿一日よたけいかつちの見みとひらちの

國司まことに位ふかく弱ふかく侍りのりもれて廉まして
乃校をむちはまくせ給ふいせのくまなりの影よつ
くせ給はとともに中臣氏連時風秀行と云人也十二月
七日に大和國あへ山よつき給同き二年四月九日三笠山に
あとをあまき給て天照屋根命 主命姫大神此御
まくへ命氏中臣をまつせけまくと秋豆命八下総國香取
まうつくせ給ひ天照屋根命八河内國平野まうつ
里給ふ姫大神と伊勢國まうつくせ則あまてる大神
の分身とてまますなるくしに日本門より勅使をたらまくに三笠山に下つ
氏根に宣旨いとくきたてかれ四こくらに物部をあつめた
てまつくくきすとあんきなくに乃くはつるやえ氏
月廉偽祭平野祭を先もとれ
中乃日奉遣せくはあんきを毒日同 **一南祭** 石清水源時祭也

三月中午日先二月に行れ勅人使舞人を
中宮中の辰乃日試楽くるあり此度はまた庭より侍

おたてお御るこをめをよりてすれこなるくなくり
さまくに四位五位の勅人殿に地下に殿也次年中
行るれ障子れりこのりてに氣色うくひて當殿
着てお庭をるて御れ戸まて舞人をめす舞人すく
お作れ其乃下まて作れ桜を形てくくにさす仁寿
殿の庫乃下よりまくくこてにおにつくりたつ倍位を
清れめに人求ふうこひ翌今年ひらまこされ吉をのハ
す舞人舞をりて大法礼久
まりけつおれ試楽ハ近法ハ行く連給めや世れく
免よハ必ある延試楽を御楽とをもつり先舞楽をもの
心むる心延當日ハ法禊あり庭
下かくくの花を使舞人の冠よさす三献りハ又献果て
うさねうくけれるまる天暦五年四月廿七日始て氏源
時の祭をまき是ハ五年一年將門ゝ乱逆れるまくに
祈かるひまるに八幡大神兄つくかの將門ゝ首をきり給
上時乃使ハ播广也先四船長舞人うくに人各十人を

行末る八幡の宮乃石清水の行末をくつへまつる是
八幡の宮よりなん給はりける也天禄二年三月より
毎年の日八月十五日也毎年の恒例なる也
其御おとゝ兼家卿なとの勧盃禄なと給

一縣召

御宴をもよほさるゝ御宴とハ諸国の司也
御宴をたまはるゝ也其御宴に云なり御国の人をめして任
ていを給ふ庭にてなり行事也殿上人也殿上人まいり
同かくの庭付とていとけんもく殿上の雑事をして家々
の官位流々の家実也殿々よりにて大なる節会
宴の饗叙除目を八四ケ度大なる職事ハあとにゆ
ゆをもる名簿也四簡名同如へ秋満更任符返上なと云
中文也多く数を不知をかゝるそ除目よりつけもるへき
すさも八十年の学よもきハ免難一百丁のゝ所ふも
書のへくこれハ先達よりなるゝ八たやもく
つとむへきもの也武日八十一百より初て十三百まて

三ケ月也景行天皇の位宇武内宿祢を棟梁臣なさ
る是官職の始也孝徳天皇大化五年に八省百官をさだ
めらるそ是より官人八大連なと云号ありさ文武天
皇大宝元年淡海公不比和より勅をうけて律令をさだめ官位
位階のゝをのせたる也是ハ和らくはそうる宴もあり又
そへらる職位りきはを令和の宴とハ中務大臣中納
言八大宮より以前よりも是ハ
きすさらそ也へきるもあり
ある諸司をもよほさるゝ京官除目とハ京ふ
はの年の人なを任也

一須戸乃法師

為上巳日可為素也

三月始の巳の日源氏
ものゝ為てあそくゝる
上巳の日殿あるを

一あまをとこ里

茅ゝ

鶯の巣

巳上
素也

正元也禁裏
ゝ二月

一心乃花

二なるゝ月ゝ也素八素に
尺うなふ所に見れ羽

一白毛

おの

を二三まい白き羽まて侍く也又春たりれあるくある也その
上にかへりてあるといふ説あるなんとて羽を白く侍く二の
上也大たかハえしの羽小鷹の尾なとすりあるくあるか時節の
まさよりのてよの羽二まいをかへりて侍さ無る也當の字也

一志賀乃山越　三月春之説　然共其外春　今の山道より南の　くろたりある

一神祭栁取（さりきうり）　さく未元卯月に有れハ神山乃なりの　えりしハわしく侍えもなし一つもあるまたに

あるなりしハに法供なとも也　胃月也

一杜若牡丹　三月歌合説依　菜摘か夜に入らく

ありさつくるさ　おたん夜也

一毛をふる鷹并鳥屋（とや）

鷹　巳上二夜也

一平野祭　夜也　上申日延暦に此社祉をハ道をあまて貞
觀よりの此祭礼をハ始行せらる上ハ毎内侍むかふ近衛乃
せうむりかて貝覧をまつりて内に参りて奏す源氏

の条あり又侍後上人法りひをつとひ御勝葉人とてかふつる
ひあり法幣なとと賀茂の臨時祭のこし此臨時のみ祭ハ寛
和元年四月十日よりえしめらる可此時の侍りひハた馬
檢佐藤原惟成也定かし弟一の院後ハ源氏弟二ハ平氏
弟三高階氏弟四ハ大江氏まてハ姓の祗神
まてましますなるえし九月申日もあるり月小日
郭公にむもとひ　時鳥ハ春と云字夜涼生夜
てハ夜なり　なくてハ春ふなります

一鶯

一鮎（あゆ）　夜也
あるハ春也さそひ　やなも夜のかりやなハ春也やなうつも夜
あるハ秋なり　えくまれやなハ秋也くたりやなも秋なり
おちあゆ

一清水　夜也但云後不當ふ可為夜也
も秋也

一五月のなす雨
雑也むすふと云てハ夜也川ぬをむすふハ雑也清ぬむすふとしても夜也
も不嫌方

一稲妻（いなつま）　稲妻めすす　可為

一日晩　日ニ云字まも　萬と云字まも
水鯛とも云

一鶉鳴　秋えるの　鳴まするを

してとる也節をして也略節
とあり吹風なくふる白雲
拍 拍子のうの第のをして
このの拍子なり一也

一楸桐 楸桐子 男たり **一蔦芭蕉** 蔦芭蕉子
一裏

菓子やつくり初名物 初名物 お月 云やこめて 拍つくる也
とれたるゆても 初てくる也

一小たく物 小たく物 北動 拍 みくさ
一鶏卵 鶏卵 ちゃ
衣也うつくしの色のくく也唐よりてよる
子と云ちき初たり生義よ二百もふ也

一菓子拍子 菓子拍子 **一壹拍野** 壹拍野
八拍也おなのうる秋萩なもとも
いくくうる也秋かるふ久ひすへ拍也
八雜也

一河内国司 河内国司 名の菓のうるは名也
されを也と云字弦也

一相撲 相撲 ま

是八法國の使法人弦石あつめて七月よ相撲節
と云て天子の法弦をるる也是十六日の法ひさ
よ石作をる上の勅弦拳て左右の近衛次將小相撲をくきゆを
弦石作左右乃近衛方弦分て國〳〵へ使を下して相撲
を石是弦万葉よハことり使とり也廿六日小内弦と云
るるる豆上仁寄屋よおゆ弦なるる左右の相撲人犢鼻
のよりきぬくるま弦きて一〳〵ふをまひ弦弦て勝
屋るる廿八日よ石合あり天皇南殿小おはなるる云る奉上
す大和相撲奏てとり十七畫弦て勝れ方乱声るる
廿九日よ拍おとて相撲弦するて法弦せるる也祢
龍三年よ始て法國より めりのるせらる〳〵寛平七年
よ日本紀よ垂仁天皇十七年七月よ當麻の村よ勇士
あり名を當麻蹴速と云力法くきるる角をもきき
つ〳〵天皇ゆ中を中石て是弦つるくき人弦群臣に
るる〳〵るる出雲國よたけさおれこあり野見の
宿祢と申者作る中を奏す則是弦めて相撲を

此説んせしる野ひんの宮孫力やまきりたりくん顕速か
こしをうちへしまそてたち所よふこころし侍りき
是すまひ此 **一放生** 祈祇お
猶かんりし 也 奏
月と云字 **一星月夜** 後撰ふよみ入る也
下脇たる **一秋去衣** 七夕此 七夕此夜よ出来も
奥也
きのこなきさる事也七夕此秋昔し一夜こきらる衣なるへし
秋ふして秋さり衣さむけきにいてかふきてそむこの
山風ともありけるうの八 **一願(ねぐひの)糸(いと)** 同
七夕の夜ふをまきさらめる 上 七夕此具と云ん也庭上
にを巧此針八さかのさきにあ绝此いと綫つけ手向よ三年
此内よ願かなふと也郝隆八腹中此書をさらし流蔵八等
上此禅を手向し出ちめし侍まやことに女房 **一鵙(もずの)草(くさ)**
なるの手こくやうふなすと云ていとを命る
茎(くき) 極拘也
表されハもすの草くきみて 絡せてまれかんやう
ん君かあくり綫むし男なるかなる哥をゆき

なくふ女ありくりけこらひよりてけれハまかれかんとする時
男袖をひこさくて女此おとく綫同なれハ鵙此くろ草此き記
とさして我かまへくかえこてにあさまりといひてまかれぬ
右万葉ふ集まる此寺也表此寺と云也 哥昭云 鵙の草よ
くきとハ伯労此草よく隠と云也多く隠をくきとよむる万
葉ふ此寺の読寺とも別裁より清輔奥義抄よハ鵙の為
くろ草のくきを以り定家卿も此草くきのきちよあるさ
まゝろ里ふあると部しへ多みるすを中侍り此説よまゝ
ハまれハ君やらん見か何かりを慈此寺にの世説を姓
あるにゆふり八雲抄御説よハ鵙のおろ草くきをさして
ちるへふいひるをみちよたるよそのおとなしと以云
なり俊頼朝臣偽物より通作哥季此許へをくる寺
さへしなよ奥くて此そに見かくれてまゝすの草よくきめちな
らぬとも古哥昭云或説本此義りて志るし此草男へを
と云義ま 俊頼八こもん不よ鳴くやと以り又鵙此くき
ふこき百舌八まゝ八时鳴る此く聞めひまてあをけるの时

ゐるれゐつてをみて久さうりあつえゐのをりにかゐら
やうのもれをくさくぐさにたしとえささて时ゐのく
川てふ猶しゐろとろやこれを贈れぬやまへともやう
めぢれあとにたりかなりされとも後人さうもちひて
よみゐる事も 一手ゐる ゐまふむすひ入てハ秋也 一扇を置
あるよや 扇をまつ際と云も秋也言白癡別へ涼下向
ゐ秋ゐ事 れ後別ふ宗養まて百韻ふ言御句あるふ
依ゐ也
秋さ只拍まひまつゐも久ゐんふそてと 一冷 依拠不可秋
秋ハあそひさろ秋の出事なり 之出路ゐ
一説秋の季ゐ大切之 源氏ふ夜あそひなとしまさまし
时強用之ゐ例 きはなれハと云ふつりぬるすなるを
清少納言枕草子ますさましき拍老母れけゐハ火も
をこぬまひゐのゐしてゐ事すれ暑月なとゐを只先ゐち
りてしてハ 一秋蜜ゐ乃しむ 已上 秋を蜜ゐと
秋なり 秋也 是れハ秋ゐ迄

一あえ雷 初雷ハゐゐゐと しても冬也 一なゐされ时雨
庭火 神楽なゐの折庭ゐ炎く也かくらの时計也
御ふ 居所ゐ已上不嫌之庭ゐ於嫌也燎の字なゐ
座を 一木れ葉衣紅葉ちりて拍をそ
むる 紅葉れちりて於なとやうれ拍の上の色ゐふなる
ゐゐのまつり ゐすちろちゐ紅葉ふハ秋と也色と云字むさひて
も秋 一水祭 賀茂の臨时 先道目ふ伏禾禍禾なと
なり のまつり也 云ゐ之当日れ儀式御
けい庭れ座なと石清水ふ同於に此儀果て使等人帰庭
ふゐり還立饗あり禄ひさしふ御階子を寺河に引
なをりま清華鞋をめす かくれまよりおさせ給りて此
ゐのさをりれ庭南ふ二行ゐ座をしきて使等人つくう
ろよりと来れ神楽れ所作人陪従近衛のかつと人つとお
御ゐて只ゐめしあれそゐのこなゐそしふ依をくれ下

より彼已下にいたりて使ひ下をめすけんとい
ふて神事をとゝのへ給ふ庭火よりも日数をへ
て人長さゝらしあり清祓ふ事ありて御祭の起
多御門いまゝ王侍従とゝ
るゝ賀茂大明神祭
ゆされ者はさやうのるはたり給すゝ
へとゆされ々れはやうもて
れはいくゝとなくして
給ひられて寛平元年十一月より
せ給ふその時の使はな流大長
発給ひけるとゝ

一豊明節会

（あきのせちえ）

秋

是はと年九穏を
祈にもゝせ給ひ
て今日忌も中ゝ
まつりあるとゝ
来年のうゝにこそ
る上ゝ宰相か舞の上首

小忌衣

（こゝろ）

祈ゆ時こそる也
大忌ともき物

まつりけて内舞已下所にゆく時酒の正酒の盃を
献ぶ当大舞もよをして舞姫のりゝ
しゆゝ酒り入るゆゝ人たゝ上
儀馬乗なとうたゝ節会の義
のゝと物基の乱舞也ひんゝらうたゝ
ゝ昔ハ節会の所也とて物あるゝ
人ゝを物基乃乗にちゝくめて
出賀ゝ発すゝて
ゝとりひてゝ
大嘗会の時ハ辰乃日を
節会とやゝ祈乃ハ
数ゝ節会ハ数ゝ
是ハ時ゝ
物なゝるを祈紙也
ハ二三やゝ
宗牧乃不知

祈ゆ時こそる也
大忌ともき物
大嘗乃時いる物なり白布に
ゝ大忌ハ物基ゝ人ゝ
物基也舞なゝ時ハゝ
長ゝ人ゝとゝ
也周様

ちれし也山あひとしふも市にあひまて　一日蔭縷（ひかげのいと）
素行なとくし也大忌ハちりひ可為
芝神　賀茂乃臨時の祭ハ時かさしにかくる也さかりこ
祇　けとて葉乃まろこさ付る也天照大神ハ天乃岩
戸にあまり給ふ時八百萬の神達ハさかりこけをかくろ
ましてまり給ひしところを今にまねふ也それをいふま
てみせて　一年内立春　已上冬也　古今よハ年内よ
あくる也　春ハきにけりひ
とゝせをこ年とやいはん　花とすれ　一柏（かしは）
あるしとやいはん春の前に入まゐる冬　一椿（つばき）　ハ春也
ちりなとをされハ秋　まもこそ海みと云ハまもきぅ
おつるも秋　一蓬（よもぎ）　たく敷くそ海もいぬると
なる心也よもこされまろ称なすと云ハ世ふけハよ　一藻（もく）
もきまろくなる也此外蓬ぅ浪ハあるへし　北山抄　同浮
浅茅忘草（あさぢ　わすれ）　忘草の花ハ夜也　一蜻蛉（かげろふ）鴎鳴（にほ）入　巣
くらんさうのる也

二なるる巣之　一松緑　已上雑也緑立　こくりそ字
そても入雑也　まつみとり八春　としても春也
一堀屋　居所に二句　一宮居寺家をお　也　是麦
寺と家を　丁嫡気
おもたる之
のかにある神ある云　一里神楽　已上雑居所里神楽居二句丁
まその称さ見も神さひよくり　里神楽嫡気なるに春強く　嫡気里と云字よハ又句内裏
内裏に　一百敷（もゝしき）　百官庭にそれ〳〵乃位のたゝ見のつり　一都（みやこ）　出落
あり　そりありて百てらうしきて百所を云也
一雲上　内裏殿　一九重　已上雑居所　九うさ手の
上の事　北斗所　うちなと
まろふハ衣の袖々のさめりえんをあらうさ也古今
ちう前に九うさ手のうちますてハあそしもさろさをきなときこ　一簾（すだれ）
居所の　此外こすともむられせなしたまこめてとハ宝又
月也　車のまうれなといひてこすなく　のうりて自

絵あんの簾のかうすもあるまーきあ
弁慶のうすもあるまーきあ

一御座 已上 長歌 一菓拾 拾拾拾月菓 拾なと云八二句 一床 拾ーさなと云に二句計可懸所可弱 一床石
はかはかなとたく 菓八なとはかなの座八なり 一松門 松のまはしてもちろ門也松扶乃門なとまれハうへ拾ハ二句

一板窓 同前 一菅笠 菅蓑 同前 一簾座 菓子座 一机本
流木流木 二句ともなるなれ木と流人のもはもはもあり

菓子絵 小書菓本 俗ハ拾ハ 拾ハ冬季 付句も不懸なり
一催る 催る乗あるく名 丁准 さいえうと云八五つさ 絵 拾をもちてまいる
るをひなるのうえひあるるを云あけ云うえひたまふ
なりるをもふかを心也ま御うえふ拾ふうく

ひをうえふなるの形也拾拾拾ハ二句也ま名ふ
ふの季をもつなり弁と云八非可有

一衣裳 裳 の色の花本 不可有拾拾仮俗 ま色可ま季
花そめ衣なとまれハ白花して ま也花の紫花の衣同前山
ふま色なとの形ある也を只八拾拾ハ二句懸ーー也又養葉実
句ハ形うにもまあるにハ
ふま色の衣と申まて形
本と云拾八拾裳のとよ
てもまるる所拾拾拾 一本をきる
乃久てまるまれぬるの花を
なりぬんまりよ乃二句

竹宮 為名所仕上 拾拾拾 一志をり ちーのす 吉野山ここのちりの
一芦 鴨 蓮田 露

形のあやめ本の松 竹の実拾居所仕勢 一簾杖 さいえれたおの所也
松山 名所 一稲蓮 ものむろ

と云事也にやるとも云ふ

一苔蓮　こけむすよもぎたるる

一蓬宿　蓬なりたるたかの くひあるる宿也

一蓬草

薄宿夕影宿

を刈　ひとり也

一水鶏　くいなの事也

一蓬枕床　枕くん屋也

一又孫　おてはにみねさ

夕乃字に

一蛍　ほたる

蚊　ひる也

一蓬宿　三夕也

一蓬枕

ろる也おに不付

打敷もいく事也

一弟　弟也

一夕やと

不白敷ふる也ふやこのる

敷と云字に不付事

一いさる　巳上敷

奥ふる史

分也

よ二白事又面々

あるりもしむ

一深孫　ふる也

一心乃月　月義

也

心のさとりのる也心のあさ

義也不下為秋但秋とも

ふるやうせハ秋ふも必ず下依時

一鶉床　鶉床をうちのそりたるな

とせハ二白も下猶事志ふハ敷ふよも二白

一心のやと　うきふれまのよひの

る月乃義事下事

一真暁　暁ふ

義

一蓋乃夜　夜月ハ蓋のやうなると云る也

敷ふ式敷蓋敷ふよ事

一明黒て　明くれて敷ふに事

乃ゝ夜　夜まくこと

詞

一三日月の入　三日月の入ハ

敷ふ也巳上白

月も

敷ふ也

一月の入　巳上敷

ふの事也

夕よ二白

一月の入

敷　敷夕

ふ

一焼史　ふと云ても敷不下

為敷ふ芦史同

一夕月

一夕月の日暮時

敷　敷時

ふ

敷時

ふ

に付の字名和乃まの字同

字橋不能 いとゝくもまゝ不燒也能橋と云よハ也ニ乃こゝろなり 一雷に神

字 既不燒〻不て能形越て燒〻 一樓 あさ子 能字 俗真之不

廣考之〻

付〻ゝこゝひめ〻二句組ハ

不燒の此注を付句いゝ也

已上

燒〻 一下紐 紐 数〻衣彩也今〻此人のするをひなをも

の下帯也和名帯なをも此也下若ハ

衣よ二句 衣裳

下燒を 一ひも

也奥のひもなと云ふひれと外もなる

云も同心なり 一帯 ゝび

皆 衣彩ニ

なり 一衣〻

ゝて如〻ゝ心也あけあ〻し髪の一ゝ乃姫乃衣

衣のゝゝゝ〻ゝ能ゝ也こひなり

能衣 不燒

彩 也 一平袱の句

付て又平袱の句 不可付〻 他准之

なゝき袱の句に衣を一句付て又 一柄 ゝ

ゝひすてなき袱の句せぬなり

柄也〻付て又柄乃名不可付〻

くゝち木ゝ柄を付〻ハ柄木の柄と云心也ゝれゝ又柄の名不

付れハ名不ゝ句付〻〻〻心也〻ゝ木と云心も名木ゝなる心

一生田と云句ゝ森也〻付て又杜の名

不如〻〻頭也て〻も〻の付〻 〻〻頭 とハ〻〻

なといひけるてなと云ふ也生田と云よりく
このもりと云ふよりなとなてくつりのもりなれは
なと云ふよりなるもの
わろきなり

一樵（まき）よハ木ハ字を不可惜

木樵（きこり）

良材
放也

まさきいもくれる也まさきれんなとと云
樵なとよりこれてもふ者也木ハ戸
なとにこと云もの白小豆方
白燭よりの家養也

一躑躅（つつじ）卯花（うのはな）

花也

花と云
字による白

一茨（いばら）

也

如〻ハ無弟也正本ハ〻〻なれ也
又別に正本と云本あると云説を
家族と冷泉とこ〻〻ひきて深山為恋と云まて見くは
是ハ釜一人もなしまさきさちろうは此歌の若えるまして
あるうへ
ハと也

一あま小舟泊漕山

舟の字に付く
ふる色不燭く

あまを舟と漕ふと云説詞也ふる色に二句をあまをとあハ
つうれ月の山のたいさよりまてもみくぬ天地家隆

一椿（つばき）娘（ひめ）

玄也

一立田姫（たつたひめ）

紅
田に又白

一山姫

雑也心上
北斗祇
引合て三
白丁用ゐ
燭也引合ても三白より外ハ作〻けて
せぬ也一連歌とも三白もる也

嶺山彩也
山神なり

一立常述懐懐回

ハ三ハ連歌よハ志ひけるやうなる述懐と哀傷
なる也述懐と哀常と懐回哀傷ともれも又白

一述懐尺数乃

一白の内
よ述懐

詞句一白くに時ハて付尺数くに白也

乃詞と尺数の詞とむをんてハ尺数になる也むを
なと云字と寺仏なとの彩とむをんハ尺数なり

一て

うのえらんなと
の彩れる也二白也

にて字相合歌不付く

一東抱求子　弁紙

ひ抱ハ冬也橘家開白屋なり　弁紙の名也うゑひ抱ゑり
桁ハ必東抱求子なりとあり　冬也いつまもこのくのうち
子なと地下の素人にうゑ世話也それハ帝冬それも冬
北かに出系ゑそのやうに言ひけす八冬也求子帝人倫也

一野宮　同　弁紙と云る也伊勢物語に豆腐の前に
茶　先野宮へうつ里移て精をけんさいして
さて西川へとて桂川よりてそ九月より世人ハ
下向也なかそのそ人ハ季也いつもいせより京の御
とりの河あるなりそへとり沙汰をれハ京になる日すゑ冬
秋京下向ハあ也北なりハ京になりハなに之むけて也代より一変也

一神系乃名蓋　唯綿紙秋の季より八冬の
男ゑ弁の方をてゑるな　煙紙宵
の冬也うゑひ抱也うゑ　字より上
この後うゑ　すうゑとゑる也

一横鯛

蓬拍左毒乃ゐよ可男者　標字也玄の字をも
玄の字をもつ毒こさなり　毒れいと川也さあれ
ハ蓬よ二白也玄の字をもとも
毒の字に二白ハ可　畑なり

一若菜

若菜ハ玄也ゑ菜乃
也毒ゑ本といくて菜
玄毒ゑ玄字

とすゑハ一菜をちハ玄毒なくゑ也あゑ菜も
本の菜してゑくゑくさゑ秋の菜と云も秋のさくて
本をもこ

一稲ひ猪

獣ゑ
毒ゑ也

もろいも
りこむゑいなり稲ひりゑ毒りもゑりと申しつゑ
なくハ生菜よゑもゑ畑さりゑくゑ打越のこさひいくく
ちゑ也ゑと
せハ二白也

一紅葉の橋

為
拙拍伝白ゑ海二白也

おちつりゑ紅葉の橋ハうつもれて江くくゑつゑ秋のゑ
くくゑまゑハゑ川のゑりまてハなゑ御ゑうへ拍よゑ白

一初温

むくくゑつ堪とハ不の仕也伍子晋と云者
呉王よこゑゑされてゑ竜湖と敗て八月
十五日毎よくすも也それ
と云人あるもその父呉王闔閭
こゑくさきたゑ也親のゑ
しゑゑ也其後和与メ西施
伍子晋不了絶夫差
をゑくく夫差よくゑ
ゑ自を東門よりゑ入
後よつ呉王夫差を
ゑもいくせて伍子ゑ自あ
とて西をくゑ也伍子名人
くくの多也

一思美

拙拍なり
ゑんたう
ゑる秋ゑ云
ゑる也

一亀島

秋
也

一亀菓

一思楷

為
拙拍ゑゑの
菓

姫拙
物

毒ゑ
ゑの也

姫拙ゑゑの
くゑの山の里

よまりうるさめの地衣の形地衣霊
の地よりて可為秋色可為
霜 姫降物 姫冬 白髪のうす地 一和光うす霧
更て 姫時分 地迷懐地 和分地霧多て 一沛 猿よりうす地
ゆうすくといふ 和分地霧多
うすくふよりて蟬二白 一蛙 川の字 不蟬根色の人て
又白色二白色 とゝよ八蛙面色
て蟬可為日 一つまりすきに世字 不蟬ひとけ
あさ同くあかけあさ八二白 あさけ
地おかつるあやるハ又白地 一いさりふ毋弱に毋
毋あつてもいさり 一蟲 云ふ 不可蟬く 一夕昌蓍
けりハするあり 月之字志字 山の若々岩ク
也不可蟬く 山ハよりタ 一山乃事 蓍とまる

八海物を入てよきを
あ名海物にあるす 一和光事 海物よ
してうす 一君よ弟と蟬ク 不蟬地打或有地行 ちつく
親よりもよ矢 仕年ふ海事地 乃々を
を蟬よ八丁蓍 仕年とハさくんあるタ
乃々を乃とゝ云物ハ
矢ありてハいくめ地 一ふうさふ濃とをさにち
うさ 此され字蟬ク此彩多く
不可蟬く 一何字に幾字
付白蟬く
打或不蟬く 一さ和さ
付白地さにさをうれさの字
八ふ白さ和乃ハ不蟬地ふ猿
この字せてさ
とまむあり 一有留よ 猪 付白不蟬く 麻ケとを
も蟬ク

てうる一民乃かまど　歳末に　丁嬉二句
有也　一数の内に戸をあくる　不嬉く　是丁弱穴
と云ふに
ハいつく一横川　姥の多し一蓬もきり雑枕　枕山　付句付　嬉しく
入べきと
云ふ也一山の川　姥山数山字に　積　継招也もきた　く嫩て枕も
不句丁嬉く　也　人倫一山鳥
同
生数歳ハめとりとひとつに雛鳥をたてゝ
茶　めるも也ひとハ一未子にめるも也山鳥の尾のゝとと云もお
にかへさそと積みわり影乃うつりをとめるかとて
なく也ひとハさてよるハわりて山鳥のけ見る時も吾
いなるれけり山鳥のおろれとろ
尾もと云ハ尾の中に一のあかきる也一もて聲　山数
ても　帷幕に二句　まく
すへし　丁嬉是　一聲　獣数に男たるすもあり
継母別稚数すへし聲

我不能歳　何までもなしまる色也孔子の老子を歌
先聖候也　にあかとゝへりまし也莫是をよくつすをまる
もる八是と云ふるすをまるお
歌吾不知とぞ先聖ハ孔子をいふ　すけ
同　うりとしても一船　海路渡舟ハ禄也　一鷺さき　姥の多し一菅
茶　季なし　緑句不定る禄也　久り舟つなく　さすなと
様に　一さゝ月の光なすと月まよくへ
なし
なり八月に二句丁嬉く継ぐ丁為
林　歳ふにも　二句
一鶴乃庭まり　庭の心あるハ一のかいく　まりの場と云　丁隋
るすかり庭の心ある一國の名と國の名　三句
ハ二のかへまし
山城伊勢淡路なとの数く
るよ歌と路なとも也
一國の名と名所

丁題打越

一國乃海 名所也 伊勢ノ国ノ海ノ名ハ三ツ有ル

一名神 此条 天下ノ神ノ名ハ国ノ名ヨリ多シ

一あつまの海 名所也 東の海ノ名ハ一ツ

一あつまの海 名所也 二ツ

一ゑつこ 丁題打越 ゑつこ

一ゑてゝ国 ゑてゝ国ノ名ハ一ツ

句数之事

一春秋意 巳上五句三句者春秋の句一句ハ秋の句巳上一句ハ春秋の句二句ハ春秋ノ意

一神祇之義

一述懷 懷旧之常 巳上三句

一思羅洞 又名なと 一尾上 同 一林原

一洞 同名所也 一山乃関 巳上山新国名所

一坂 名所に又 一谷 同 一滝 巳上山新国名所

一樹 名所又ハ一樹松本 名所又ハ松本樹地よりもきり松本とハつゝよりまつんゝ

一炭竈 已上ハ山樹ハ用地 作業ハ名所にてもこれ用地

又一湊堤 名所又ハ一濱 同 一鴻臭 名所又ハ

一磯 同一于海 名所又ハ一岸汀 名所ハ汀と云ハ

名所ハ汀 名所又ハ一沼 名所又ハ一河池泉 名所又ハ一渕

同竹之内名所地 一波水氷塩砂宮 已上ハ民部名所用地 一清

名所ハ云と云て也名所用地 一浮

木系流 名所又ハ流れ地 一塩燒塩竈水

名所蛭子名所松 名所菖蒲芦蓮 名所

薦海松 名所地 一和布 名所和布ハ名所ハ名所地 一藻塩

草 地樹拘藻一名和布ハ名所 一芦海人釣伽結奥網

釣翁 名所法名魚樋下樋 以上所用名所地新武名用

お遠仍 宵今 一彩虎里憲門虎戸樞

用樋名 地 夢毛礎 何も寺と云ハ名入ハ地名所地 一隣墻 以上居所所名

一室九戸 名義地居二名 一宮 地居所 一庭所面 用地

蓋も用地 一人我衆父母雅楽寮 楽所人倫地

閑寂に田をもるれば也閑寂をすまし人倫なる人倫也

と一あん色の弱もるせきさをとすまし人倫也

嬢 同 いもせなつかいてく人倫也 一おやみと云て

茶 まこり川長し女民田子

も人倫也月をあるて むををそうつ

田のもと 一山姫未玉ふ 已上地人倫 一花の

ろ也 月をなと云よハハ

あるて月也 むををいろ月をなと云よハハ

ふへて倫白祈一の為人倫也

連句初学抄 後常見寺殺法作一条左関也

一往古以賦物為題或百韵或五十韵毎句

用其賦物近代發句計有賦物之法

脇句已下一向不云々仍注之世不詮聊

不忘旧義而已發句ハ云賦物之時二ハ渡

物をハふ云々假令山樵と云發句にも人

字不可云々人ハ山ハよも海ハ也自餘

唯々又三に渡る賦物 同 一字為賦物

お

大近代も百韵連歌より毎句悪用し
也多其真二字返言ニ下賦物之手
句連歌毎句中より常に賦物之字
上古之百韵之中不犯之中比面之句
中ニ多之近代世真俗法頗可謂無念
仍近年者至歩三句賦物之字斟酌云云
一数句勝句同字并物名ハ面八句之中
淫淫不句形可嫌之

一近代一之懐紙引延之第二句之意
述懐名不ハ形如面不付之
右之
右大概准建治式作之但當世好士而
用来多不及取捨只為止當座之淨
瀆粗而宗如件
応安五年十二月日　　後普光園院殿
　　御判

新式今案奥書

右應安新式者代道々之龜鏡也 龜鏡 龜鑑

云かめ代にてやとゝ又相也又如ゝ永ゝの遠背但未
にうつをけもちうつめゝり

宗々之近日相論之影員不式以愚意彩
筥又訪宗砌法師意見粗所記也

代々海脫条々及庭淨論々自
他加斟酌後日訪先達之決定也

享徳元年壬申十一月日 後考員之教 閑白御判

初学抄 後考員教御作賤物之美年生々

和漢篇 あんれいハひとあゝと云心也 ついをせんと云心也

一大概法下用連歌式目事 さゝ合合之大略用心也

一優漢共以五句為張但至漢對句下及
六句之事 五句ハ句としてもよく句のてハつゝめ也漢ハ章句
ゝゝとして對句まゝて云句まるまゝ也對句ハゝん
そうれ
ゝゝや

一京物茅未不負敷和漢下通
用之但雨嵐背古曉老不之彩和
漢各下用之 背古老雨嵐曉年とハ漢よりも如
常用和よりも書ゝれゝゝゝ用也

數此如くなる也

一同季可隔七句同字并恋述懐不可隔五句 同連歌式

一自余隔七句之物可隔五句 恋ハ述懐と同事也 月与月此類也 月与月季をさへ隔れハ又句さるも也

一隔五句之物可隔三句 山類と山類名 与木色木と木此類也日与日 風与風煙同字嫌同字ハ分句去也

一隔三句之物可隔二句 そひきると二句也あさ时

嫌打越物同連歌式目

一山類水辺居所衣裳不可為打越 分夕时分ハ如連歌也

男分別す 但今大りなにてくあら和漢打用之御法なとさくさるて一の体るりと也

一万物異名并本行可定其季但不可為本行事 漢異名を本行より四季をさへし

一假令金鳥ハ日銀竹ハ雨金衣ハ鶯鳥衣ハ燕雪鶴ハ鳥鯨ハ鐘 めはなし之類

一可依連歌異名抱之例 連歌に本行又異名と二段まで心にはやうなるかに漢に又本行をすへきもの也

一聯句中可定其季不字之事

一暖芳 花之意 一紅 同 一淑氣 陽春のことなり也是はれいすきくやくらく

一焼痕 焼原之事 一踏青 かけいの事 あをくちこ月にあをすあをきなとを

て万人拾ふ也　一芳草　めぐみ　うるはしき　くさ　一新緑　新緑也　くさ　一霖雨　ながあめ　一暑寒　あつき　さむき　一麗　日　一草木乃茂字清れ　四月　茂字　清る也

四月　秋又清し　一初涼　新涼　日　一冷　爽事也　冷心　爽秋の爽秋の爽たかう　一金氣　木火土金水にて　秋八金也　一黄落　めぐり　おちる　一枯　草木の心也　拾枯薪也　一朧　十二月　くもる也

一探梅春信　まれまれ　ちらきらん　一守歳　歳末　年　冬也　とし　てゐめこと也たつこ　一信　書　音信也　みのり　一客　他賓客　客

賓まらふとそよむ賓客　ひんのくハ客人なり　客也　一葉身　舟　一漂泊　めぐり　漂泊也　西東　とたく　ふらふら

一錦字　羨若蘭也云女の賓淄と云者に思ひ　てよれつまの可ひろうする絹　詩を　織物　おりたる　一作涙葉　四種　作川　涙　本の　葉文　詩　やうれ　心也大種　まるまるあるもの　見る　まる　一私語　只姓人なり　ハ他人偏義　ぬしる　意也　一人名　名ある人偏姓ハ不為　人偏姓の依る也　人偏也一人して名姓可　仁如　名利　ハ　他人偏　一字称　おもて　浮世　浮世を　浮世を　一書

不 ぬ代ぬ 述懐也 お処もなき心をおもふハ出家也 処とハ隠遁也又ハ心をよりて述懐也

一絲 細糸也 一寸[illegible]

一穩定 定ハ座禅也 俗人ハ座禅とらす ちやう定に入るも座禅也 功をもやし仁[illegible] 義也志無く ハなす也

一錫 あかしく [illegible]

一遁処 述懐也 処土と云ハ世をのかれたる人を云也 かくれゐてよりも まんせぬを云

應安以来新式之今案追加各[illegible]幷代

用捨此篇目依多其端来学常迷之

商量而今彼是勘以為一冊但猶未一

決之事或皆漏之或先載之以待後君

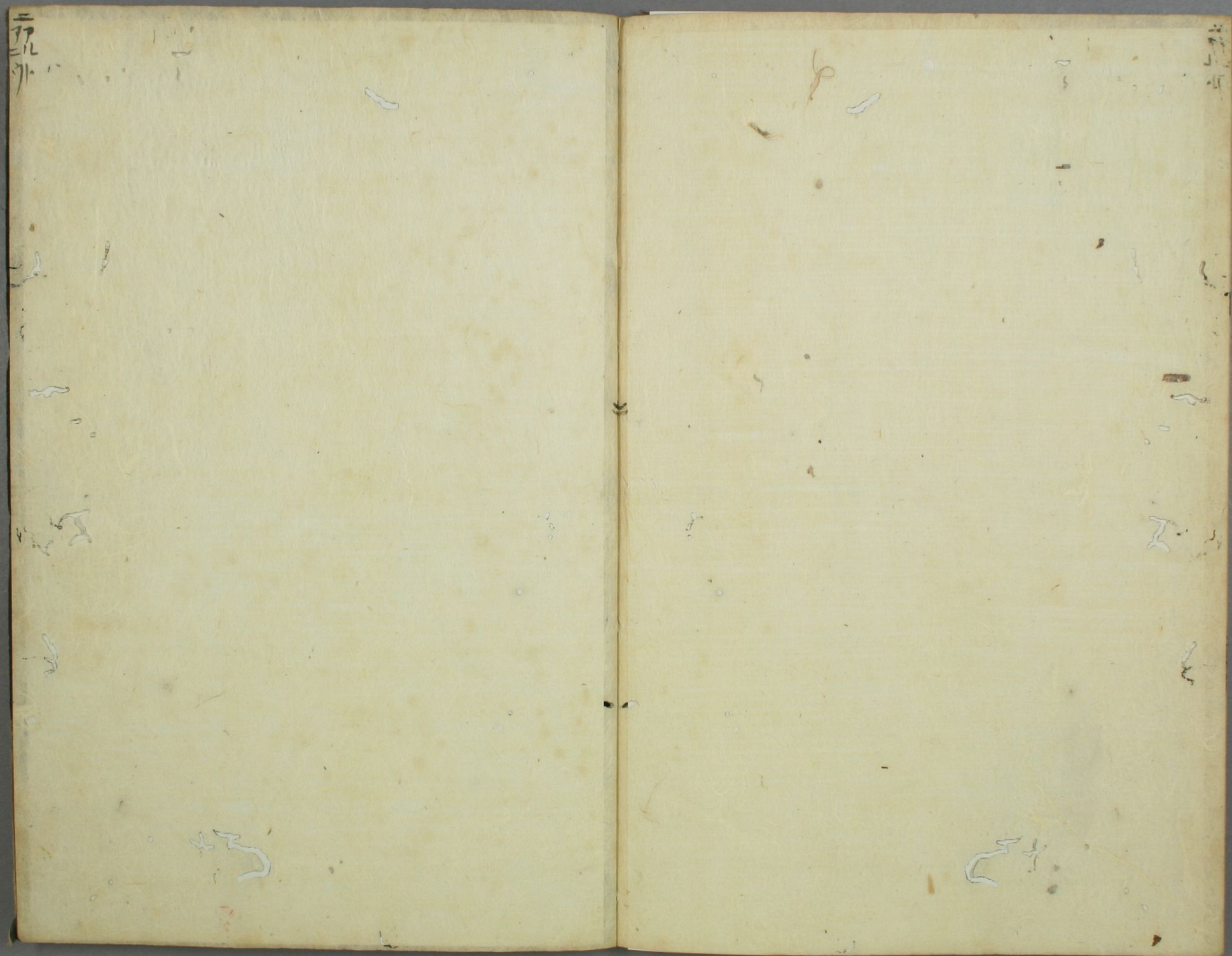
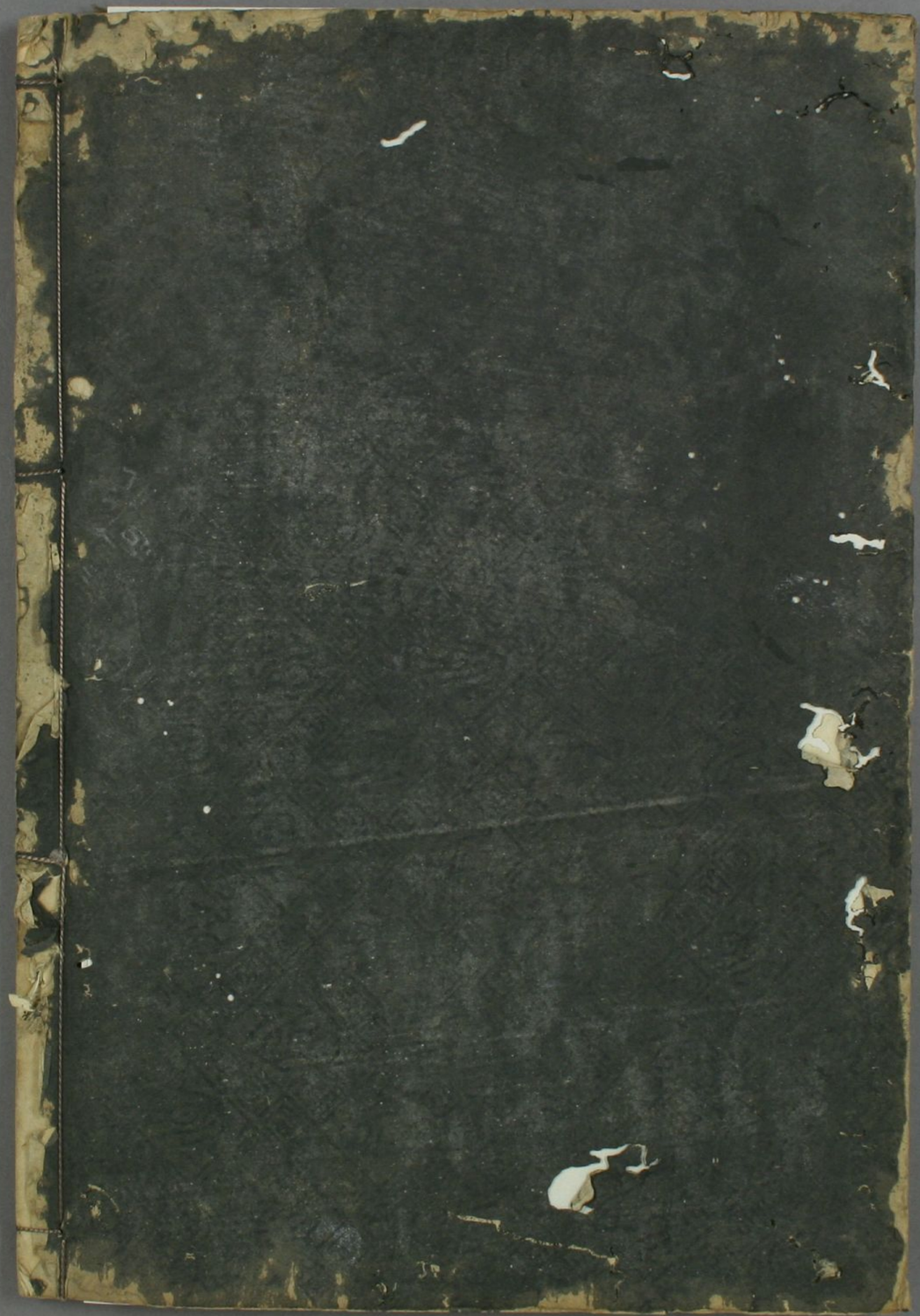
子志同者従之亦宜乎

文亀辛酉林鐘上澣

澣 あらふとよむ 一月を三度にわけて申詞

上旬中旬下旬之 心也 院此字も尤あらふ 同

一勒 物を二つよひにくくる心也 くくるとハ 心也くくハつくと云心也 一綫(?)ハ君子大学ハ羽也大学の時ハ待ハ字ます 也 ゑ合ハすと西 屋阿弥 背阿やまりを [illegible]かいとうに立 夕咐ハ[illegible]り

一遁処 ゆうハかくる心也 ゑんきよなり

一夕食間